

第16回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



中学生の部 優秀賞 受賞作品

『ちりばめられた宝石』

千葉県

千葉県立東葛飾中学校

二年 渡邊 真子

ちりばめられた宝石

千葉県立東葛飾中学校 二年
渡邊 真子（わたなべ まこ）

私の住むところは千葉県北西部のとある大きな町。私は登校するために毎朝最寄りの駅までバスで三十分もかけて向かう。私は、バスの中から景色を眺めていると、何だか言葉に表せない、小さな違和感を感じる。

私の家のすぐ近くには、そこに居るだけで、ざわざわとした心も凪いでゆくような、静かな田んぼや林が広がっている。朝っぱらから、鳥たちのにぎやかなあいさつが、窓越しに聞こえてくる。まるで外にいるかのように。自然がとても身近なのどかな町である。春先は、鶯がホーホケキョと歌練習を始める。最初はまだぎこちないが、一步一步着実に上達する。見習わなければならないと思うながら毎年一年が過ぎていく。春、揚げ雲雀を見るころには不釣り合いの大きさのランドセルが楽しく揺れる。そして夏。緑輝くみずみずしい稲たちが風でさらさらとゆれる。次に秋。眩しい黄金色の稲穂が首をたれ、落ち葉がさがさと音を奏でる。冬になれば寂寥たる風景が広がる。いつの間にか、庭にツグミが居たことも、野良猫の子猫が鳴いていたことも、雉が居たことさえもある。ただの住宅街なのに、子供達が和気あいあいと、ほほえましい様子で遊んでいなければ、ご近所さんの立ち話でさえも良く響く。そのくらい静かな町。

それと対照的に、駅周辺は、色が少ない。真上を向かずして見えない空を見上げて、色を求めたくなる。歩けば、押し寄せる人の波に抗うことで精一杯になる。雨の日なんて、前から歩く人たちとすれ違うたびに傘がぶつかってしまふ。何百回歩いても慣れはしないほど驚異的な人口密度である。何なのだろう、この息苦しさは。一日の終わりに、疲れ切ってぼんやりとバスを待っていたら、どこからか音楽が聞こえてくる。楽しそうな人の声、車の音。音であふれかえっている。雑踏とはまた違う明るい音。

それに加え、ショッピングモール、飲食店、カラオケボックスなどが四方八方にある。数多くの電車が行き交い、数多くのバスが発着する。駅にさえいけば、何でもできてしまうのではないか。そんな風に思ってしまうほど、とても便利。それ故、人が山ほど集まってくるのだらう。人の活気であふれている、わちゃわちゃとしている大都会。

一方、駅周辺を歩くと、藤、カラスノエンドウなどを見つけ、安心する自分がいる。私の庭にたまに遊びに来るハクセキレイも見つけ、嬉しくなった。駅にも生き物は住んでいる。コンクリートだらけの過酷な環境でも、自然は存在しているのだ。それでも、同じ市内であっても外れにある私の地域と、駅周辺から見た景色は全く別物であると感じてしまふ。人工的な色であふれる街。自然が身近な町。活気であふれている街。静かな町。同じ市内でもいろいろな顔がある。駅のデッキで、音楽家になることを夢見て路上ライブをする人々、それを応援する人々を見たときは、胸が熱くなった。初めての経験だった。もし、駅に訪れることのない人生だったら、こんな感情も知らずに終わったのかもしれない。

そう、私の住む地域も、大都会であると感じられる駅周辺も、すべてを合わせて私たちが住む「まち」なのだ。一見正反対でも同じ「まち」。明確に区別する境目なんて存在しないのだ。匂い、目で感じられる季節の移ろいは、私の心を動かしてくれる。喜び、儚さ、驚きを通して、自然は私たちの心を豊かにしてくれ、輝きを与えてくれる。それが自然のある地域の良さなのだ。また、駅の喧騒にもいいところがある。夢に向かって輝く人達を見ると、

前を向いて一歩踏み出そうと思えるようになる。カフェで楽しそうに語らう人、青春を謳歌する若者など、知らなかつた世界を垣間見ることが出来る。色のない世界だと思っていたが、心の中は色であふれている。同じ市内でも十人十色で地域によってそれぞれの良さ、役割が違う。私たちの「まち」を表す言葉は「ちりばめられた宝石」。地域によって、それぞれ違った色が存在している。自然に囲まれると心の中の色彩が増え、駅では人の活気で心に彩りがもたらされる。地域それぞれの違った良さと、地域の中で生きる人が、一人ひとり自分らしく輝いている。そんな意味が込められている。